

R-GIRO 研究プログラム 進捗・研究成果報告書（第2回）

(2014年4月1日～2014年9月30日分)

(1) 基本情報

拠 点 名	年縞を軸とした環太平洋文明研究拠点
拠 点 リ ー ダ ー	文学部・教授 高橋 学
実 施 体 制	第1グループ：「環太平洋地域における人間＝環境関係の人類学的検討」先端総合学術研究科・教授 渡辺 公三 第2グループ：「環太平洋各地の年縞分析による緻密な災害史の構築」衣笠総合研究機構・特別招聘研究教員（教授）安田 喜憲 第3グループ：「環太平洋北部と西部の重層圏としての縄文文化と弥生文化の移行解析」文学部・教授 矢野 健一 第4グループ：「環太平洋における地震・津波災害」文学部・教授 高橋 学

(2) 拠点形成の研究成果（拠点全体）

顕著な研究成果	<ol style="list-style-type: none"> 1. 現地調査によるデータの集積：カナダ、パナマ、モンゴルにおける人間＝環境関係について、個別の研究計画に即して現地調査を実施し、データの集積を進めた。特に、カナダ調査では、前年度に未着手であった南北アメリカの先住民社会における環境保全の現状を確認できた。 2. 縄文遺跡データベースの構築：関西地方における約5800基の住居・墓・貯蔵穴のデータベースが完成に近づき、約1万年間の縄文時代の人口変動推定に着手できることとなった。本データベースは、年縞が明らかする環境変動に対する人間側の応答（環境適応）を解明するための情報基盤として必要不可欠となる。 3. 地震データベースの作成：日本列島周辺における1923年～2014年までのM1以上の地震について汎用性の高いデータベースを作成（高橋学，2014年7月）、また、成果の一部や分析結果は、メディア等を通じ、広く一般に情報発信された。
主な研究成果 （3件以内）	<ol style="list-style-type: none"> 1. 国際ワークショップ「How Forests Think 森はいかに思考するのか」の開催：2014年5月21日に Eduardo Kohn 氏を招聘、南北アメリカの人間と環境の多様な関係のあり方が示されるとともに、それら「人間＝環境関係」を検討するための方法について活発な議論が行なわれた。 2. 水月湖年縞堆積物のボーリング調査：今回の調査により、湖底下約100m（約18～19万年前）までの堆積物の存在が確認できた（以前は78m）。これほどの堆積環境を保存している湖は非常に珍しく、日本中央部の古環境変化を考察する上で極めて重要な発見である。 3. 京都盆地における縄文時代の洪水頻発期の発見：京都府向日市の寺戸川左岸で採取した河床堆積物の放射性炭素年代測定と岩石片組成分析から、5700年前頃（縄文前期）に大規模な洪水が頻発したことが明らかになった。当時の水文環境を復元するうえで重要な成果である。
若手研究者の 育成結果	<ol style="list-style-type: none"> 1. 富田敬大：論文（1報）、図書（2報）、学会発表（2件）、研究会発表（1件） 2. 篠塚良嗣：論文（1報）、図書（0報）、学会発表（4件）、研究会発表（1件） 3. 中村 大：論文（0報）、図書（0報）、学会発表（1件）、研究会発表（4件）
大型国家プロジ ェクトの採択 結果	<ol style="list-style-type: none"> 1. 科学研究費助成事業新学術領域研究（研究領域提案型） 総額93,245万円 不採択 2. 科学研究費助成事業基盤研究（B）（一般） 総額676万円 不採択 3. 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 総額4,710万円 不採択 4. 二国間交流事業共同研究 総額240万円 申請中
拠点形成の取組 みの課題	今後増加すると予想される寄贈資料・分析資料の保管場所、データベースや研究情報を広く公開し活用を推進するためのサーバーの確保をはじめとするIT環境の整備が必要である。

(3) 研究進捗の状況 (グループ別)

① 運営委員会以外には開示しないことを希望する

第 1 グループ	環太平洋地域における人間=環境関係の人類学的検討
メンバー (所属)	GL: 渡辺 公三 (先端総合学術研究科・教授) TL: 小川 さやか (先端総合学術研究科・准教授)、原 毅彦 (国際関係学部・教授) 拠点研究員: 森下 直紀 (和光大学・講師)、近藤 宏 (国立民族学博物館・外来研究員)、石田 智恵 (日本学術振興会・特別研究員) 専任研究員: 富田 敬大 (R-GIRO・専門研究員) 博士後期課程院生: モリ カイネイ (先端総合学術研究科)、梁 説 (先端総合学術研究科)、岩田 京子 (先端総合学術研究科)
研究実施場所	衣笠キャンパス修学館プロジェクト研究室 220、他
内 容	<p>①研究の進捗状況</p> <ol style="list-style-type: none"> 環太平洋地域における人間=環境関係をめぐって、各メンバーが個別に研究を進めるとともに、フィールド調査によるデータの収集を中心に進めた。これらの成果を共有するために後期中に研究会を実施する予定である。 渡辺は、8月7日から16日にかけてカナダに滞在し、ヴァンクーヴァーのブリティッシュコロンビア大学の人類学博物館で資料の見学、トロント近郊のイロクオイ連合のリザーベーションでの環境保全の現状を調査した。 森下は、2014年8月21日から9月3日にかけてカナダに滞在し、主に次の三点について調査を実施した。第一に、オタワの国立公文書館 (Library and Archives Canada) を訪問し、アーカイブスのシステムや収蔵文献などの情報について習熟した。そこで、先住民族の有機水銀汚染に関連する行政文書の多くが (当時) 秘密指定されていたことなどを確認した。第二に、トロント大学の First Nations House (1992年設立) を訪問し、1992年に先住民族を国内法の枠組みで扱うようになったこととの関連性を調べた。第三に、オンタリオ州の Asubpeeschosewagong/Grassy Narrows および Wabaseemoong/White Dog の Reserve を訪問し、現地の代表者や有力者をはじめ、現地の住民に聞き取り調査を行なった。Asubpeeschosewagong では、聖地とされたいくつかの地点を訪問した。具体的な成果としては、午後の有力者との関係性の構築への端緒が築けたことにある。高い失業率、アルコール中毒者の割合は、両地域とも共通の問題として認識されていたが、Asubpeeschosewagong の地域では伝統文化の復興によってこの問題を解決しようと試みる一方で、Wabaseemoong の地域では近代化によってこれを解決しようとしている様子が明らかとなった。 近藤は、7月上旬から9月末にパナマ東部地方先住民エンベラ特別区に滞在し、当該地域における森林利用の現状について調査した。 富田は、2014年7月27日から8月18日にかけて、モンゴルに滞在し、私有制の導入と市場原理という新しくそれゆえ不安定な制度への移行期において、モンゴル牧畜経営がいかに再編されつつあるのかを、特に都市近郊における零細規模の乳製品取引に着目して検討をおこなった。さらに、滞在中には、国際会議 “Changing Patterns of Power in Historical and Modern Central and Inner Asia” に参加し、都市近郊における牧畜経営の実態とその特徴について報告を行なった。 <p>②拠点形成に向けた取組み状況</p> <ol style="list-style-type: none"> カナダ・McGill 大学の Eduardo Kohn 氏を招聘し、エクアドール・アマゾン上流地方の先住民の調査をもとに、人と野生動物や狩猟犬などの人ではない存在とのあいだの交信を先住民がいかに捉えているのかについてご報告いただいた (2014年5月21日)。本ワ

	<p>ークショップでは、大阪大学の大村敬一氏をコメンテーターに招き、南北アメリカで発展した自然の様相についても議論を行なった。</p> <p>③若手研究者の育成状況</p> <p>1. 本年度より専任研究員として雇用している富田は、前年度に引き続きモンゴル調査を実施し、その成果をもとに学術論文の投稿、研究発表（2014年5月、東京・幕張、2014年8月、ウランバートル）をおこなった。また、外部資金申請にも積極的に取り組み、高梨学術奨励基金若手研究助成（2014年6月、100万円）および三島海雲記念財団学術研究奨励金（2014年7月、70万円）を獲得するなど、着実に成果を挙げているものと評価できる。</p> <p>2. また、現地調査や研究発表を通し、グループ内の若手研究者の育成にも取り組んでおり、モリは、3月に台湾を訪問し、華人キリスト教者に関わる調査を実施した。近藤は、6月にスウェーデン・ヨーデボリにて開催された Society for Anthropology of Lowland South America の第9回研究大会に参加し報告を行なった。同学会は、ヨーロッパ、北米、中南米の研究機関に在籍する南米低地地域研究の専門家が集まる領域横断的な学会であり、同学会に在籍する日本の研究機関所属者は近藤だけだということもあり、海外の研究機関に在籍する専門的な研究者たちと交流することができた。</p>
--	--

② 運営委員会以外には開示しないことを希望する

第2グループ	環太平洋各地の年縞分析による緻密な災害史の構築
メンバー (所属)	GL・TL：安田 喜憲（衣笠総合研究機構・特別招聘研究教員（教授）） TL：外山 秀一（皇學館大学・教授） 拠点研究員：山田 和芳（ふじのくに地球環境史ミュージアム・准教授）、藤木 利之（岡山理科大学・講師）、森 勇一（金城学院大学・講師）、那須 浩郎（総合研究大学院大学・助教）、北川 淳子（福井県里山里海湖研究所・主任研究員）、野嶋 洋子（国際日本文化研究センター・プロジェクト研究員）、Xun Li（ニュージーランド・GNS Science Researcher） 専任研究員：篠塚 良嗣（R-GIRO・専門研究員） 博士後期課程院生：福本 侑（九州大学大学院理学府）
研究実施場所	衣笠キャンパス修学館プロジェクト研究室 234、各研究機関（大学）、他
内容	<p>①研究の進捗状況</p> <p>1. 環太平洋各地の年縞分析について、現状保有しているグアテマラ、ペルーなど中南米の湖沼や秋田県一の目潟や小川原湖で採取されたサンプルの分析を進めている。</p> <p>2. 水月湖で行なわれている年縞堆積物のボーリング調査（水月湖プロジェクト：中川毅・総合科学技術研究機構教授、古気候学研究センター長）では、湖底下100mもの堆積物が採取でき、約18～19万年間の堆積環境を保存していると予測している。現在、3地点で採取した3本のコア間の深度の完全な対比と、X線を用いた一次分析が進んでいる。今後、一の目潟や小川原湖の年縞堆積物の分析から得られる災害を含む環境変動履歴との対比を行い、より広域的な古環境復元を目指す予定である。</p> <p>3. 安田が、2014年2月、中南米（ブラジル、チリ、コロンビア）を訪問し、新規ボーリングの対象地を選定した。今年度、山田らが、マッケラス式ピストンコアラーを用いて、コアを採取する予定である。</p> <p>②拠点形成に向けた取組み</p> <p>1. 第1回 R-GIRO シンポジウム報告書（安田喜憲・阿部千春編著書、『津軽海峡と縄文文化』、</p>

	<p>雄山閣、(印刷中))を近く出版し、当研究センターの活動を一般の人達に広く普及する取り組みを行っている。</p> <p>2. 静岡県ふじのくに地球環境史ミュージアムと環太平洋文明研究センターとで協定を結び、研究上の交流と施設の相互利用の促進を図る。また、今後さらに静岡県と立命館大学との協定も結び、県と大学レベルで交流を図る予定である。</p> <p>3. 福井県と立命館大学と包括協定を結び水月湖の年縞に関する研究活動の連携を図るとともに、今後は福井県里山里海湖研究所との研究協力を推進する予定である。</p> <p>③若手研究者の育成状況</p> <p>1. グループ内の若手研究者による年縞研究・分析は順調に進められている。例えば、篠塚は、水月湖のボーリング調査に参加し、最新の掘削方法およびサブサンプリング方法の技術を習得、中川毅教授と研究の進め方などについて意見を交わした。</p> <p>2. 篠塚は、若手研究者育成の一環として行なわれている定例研究会で年縞に関する研究を発表し(2014年5月、立命館大学)、本学の大学院生や大学生と意見を交わした。また、年縞研究に携わる若手の発掘に努めている。</p>
--	---

③ 運営委員会以外には開示しないことを希望する

第3グループ	環太平洋北部と西部の重層圏としての縄文文化と弥生文化の移行解析
メンバー(所属)	<p>GL・TL：矢野 健一(文学部・教授) TL：千葉 豊(京都大学文化財総合研究センター・准教授) 拠点研究員：丸山 真史(京都市埋蔵文化財研究所・所員)、大野 薫(大阪府立狭山池博物館・嘱託)、中塚 良(公益財団法人向日市埋蔵文化財センター・主任)、佐々木 尚子(京都府立大学・共同研究員)、上峯 篤史(学術振興会・特別研究員)、木村 浩章(学術振興会・特別研究員) 専任研究員：中村 大(R-GIRO・専門研究員)</p> <p>博士後期課程院生：原田 昌浩(文学研究科)、松森 智彦(同志社大学大学院博士課程文化情報学)</p>
研究実施場所	衣笠キャンパス啓明館考古学・文化遺産共同研究室、琵琶湖
内容	<p>①研究の進捗状況</p> <p>1. 研究課題1「縄文文化の起源と終焉を中心とするGISデータベース構築の試行的研究」：中村は、縄文遺跡データベースの構築を行った。作業対象となる関西縄文文化研究会刊行の資料集は全部で23冊あり、合計約8500頁、約3200遺跡について住居・墓など約5800基の遺構と1万点を超える石器など、膨大な情報量を有する。データベース構築の第1段階として紙媒体からデジタルデータへの変換作業を実施した。スキャンしたデータをPDFとして保存し、それをOCR(文字認識)ソフトを利用しテキストデータ化する作業を進めた。居住・生業・葬祭などに関連する遺構の部分から着手し、これまで全体の約三分之一にあたる約2800頁分については、2回の校正作業を経て文章と表のテキストデータ化が終了している。今後は、道具類・動植物遺存体・人骨などを追加し、他に例のない総合的内容をもたせる。</p> <p>また、データベースは広く公開し活用されることが重要であり、構築完了後の円滑な活用への移行のため、2014年5月・7月・8月の関西縄文文化研究会の例会で作業の進捗状況や内容に関する検討課題を発表し、広く研究者から意見を聞く機会を設けた。</p> <p>さらに、本データベースは英語化しグローバルな公開・利用を目指しているため、英国向けの日本考古学オンライン英語教材を企画しているセインズベリー日本藝術研究所</p>

	<p>(英国ノリッチ)とも情報交換を行い、データベースのグローバルな活用に向けての準備作業も進めた。</p> <p>2. 研究課題2「集落立地変化と災害との関係の把握」:</p> <p>矢野は、滋賀県杉沢遺跡の調査報告書を作成中、今年度出版予定である。また、理工学部教授川村貞夫と共同でロボットを利用した琵琶湖底遺跡調査を8月26・27日に実施し、研究継続中。ほかに、兵庫県養父市熊野円山遺跡(縄文早期)出土土器(総数約300点)、鳥取市青島遺跡(縄文中・後期)の図面作成を終了した。両遺跡の報告書作成と研究を実施中であり、研究課題1のデータベース作成に利用するとともに、各遺跡をとりまく地域の遺跡全体動向を分析し、気候変動・災害等の影響を推察する。</p> <p>また、矢野は、中塚良・佐々木尚子らと向日市寺戸川での約5000年前の大規模洪水堆積層の分析を実施し、公表(2014年7月、奈良市)、別地点でも調査を計画中である。そのほか、尾関清子氏寄贈の縄文編物資料を活用した講演会を、12月19日のR-GIRO公開シンポジウムと連動する形で企画しており、翌日12月20日に実施する。</p> <p><u>②拠点形成に向けた取組み状況</u></p> <p>1. 縄文遺跡データベース作成にあたっては、独立法人文化財研究所奈良文化財研究所の遺跡データベースデータを複製・利用する許可を得て実施している。データベース作成は、他機関との連携を模索しつつ、国際的にも規範となるような先駆的なものにしたい。12月6・7日に、各種の考古学データベースの作成と利用に関わっている研究者を招聘して、福井県小浜市の福井県立若狭歴史民俗博物館で研究会を主宰する予定である。この研究会で、研究者の協力体制を充実させる。年縞を軸とした古環境研究の成果を人口動態など歴史的背景の中に位置づけるためには遺跡データベースの充実は必須である。矢野は、韓国のソウル国立大学校金壯錫副教授と平成27年度日本学術振興会の韓国との共同研究(NRF)に応募しており、申請課題は「東アジア先史時代における人口動態の考古学的復元」で、遺跡データベースを利用するものであり、中村は研究参加者の1人としている。</p> <p><u>③若手研究者の育成状況</u></p> <p>1. 中村は、様々な研究会に参加しデータベース作成に関連する有益な情報を習得、データベース作成作業の進捗状況や内容に関する検討課題を各学会等で発表し(2014年5月、京都、2014年7月、大阪府堺市、2014年8月、愛知県豊橋市)、広く研究者から意見を聞く機会を設けている。</p> <p>2. 中村は、データベース構築およびその予備的解析の成果を、2014年12月の関西縄文研究会第15回研究大会、12月19日のR-GIROシンポジウムで発表する予定である。</p>
--	---

④ 運営委員会以外には開示しないことを希望する

第4グループ	環太平洋における地震・津波災害
メンバー (所属)	GL: 高橋 学(文学部・教授) TL: 河角 龍典(文学部・教授) 博士後期課程院生: 谷端郷(文学研究科)
研究実施場所	衣笠キャンパス地理学 GIS 写真測量室、製図室
内容	<p><u>①研究の進捗状況</u></p> <p>1. 1923年から現在までの日本列島周辺で発生したマグニチュード1以上の地震を取り上げデータベースの作成を行なっている。近代以降の温暖化と米の生産量の増加によって人</p>

口が増え、居住に不適切な土地に住んだ人たちが津波被害に遭ったこと、1960年の三陸チリ津波の記憶は、核家族化や村落共同体の崩壊で伝承されていなかったことが明らかになった。また、そのデータベースをもちいて、マグニチュード6以上の地震発生以前の前震の有無について検討している。その成果の一部は、5月5日（日）テレビ朝日系列「サンデースクランブル」、9月7日（日）フジテレビ系列「ミスターサンデー」で紹介されたほか、多くのマスコミに取り上げられた。

2. 広島県広島市八木地区を中心に発生した土石流災害については、高橋が、9月18日（木）の読売新聞にて展望を発表した。そこでは、土地の履歴や人間の生活様式が災害に大きく関与しており、土地の履歴書を作成する必要性を述べた。
3. 東京都の指定した災害避難場所の安全性について、全地点の土地条件を分析した結果、逃げるとかえって危険な避難場所が多く存在するところが判明し、9月27日（土）日刊ゲンダイにて発表した。

②拠点形成に向けた取組み状況

1. 地震データベースとその被害である震災データベースを作成して公表できるよう作業を続けている。
2. 災害発生のメカニズムについての検討を進めており、土地の履歴書づくりを検討している。
3. チリ、コロンビアの研究者や国際協力機構（JICA）、在コロンビアおよび在チリ日本大使館などに共同研究や研究の支援をお願いしている。

③若手研究者の育成状況

1. 谷端には、論文作成の助言および分担執筆者の機会を提供し、業績を増やせるよう助力している。（谷端郷、「昭和戦前期の大阪市における高潮災害の地域的差異－1934年室戸台風の事例」－、歴史地理学（投稿予定））

(4) 拠点形成プロジェクトでの研究成果発表

① 雑誌論文 (査読あり)

<第2グループ>

1. T. Fujiki, M. Okuno, H. Moriwaki, T. Nakamura, K. Kawai, G. McCormack, G. Cowan, P.T. Maoate, "Vegetation changes viewed from pollen analysis in Rarotonga, Southern Cook Islands, Eastern Polynesia", *Radiocarbon*, 56 (2), pp.699-708, (2014)
2. Kitagawa Junko, Toshiyoshi Fujiki, Kazuyoshi Yamada, Yasuharu, Hoshino, Hitoshi Yonenobu, Yoshinori Yasuda, "Human impact on the Kiso-hinoki cypress woodland in Japan: a history of exploitation and regeneration", *Vegetation History and Archaeobotany*, DOI 10.1007/s00334-013-0423-1, (2014)
3. Berglund Björn E., Junko Kitagawa, Per Lagerås, Koji Nakamura, Naoko Sasaki, Yoshinori Yasuda, "Traditional Farming Landscapes for Sustainable Living in Scandinavia and Japan: Global Revival Through the Satoyama Initiative", *AMBIO*, DOI 10.1007/s13280-014-0499-6, (2014)

<第3グループ>

4. 上峯篤史, 「斑晶観察法による「前期旧石器」の再検討—出雲市砂原遺跡における事例研究—」, 『旧石器考古学』, 旧石器文化談話会, 79, pp.1-16, (2014)

② 雑誌論文 (査読なし)

<第1グループ>

1. TOMITA, Takahiro, "A Conflict between Migration and Settlement?: Pasture Usage and Management in Post-Socialist Mongolia", Ilhan Sahin, Baktibek Isakov, Gengiz Buyar (eds), *The Central Asiatic Roots of Ottoman Culture*, İstanbul Esnaf ve Sanatkarlar Odaları Birliği (İSTESOB), pp.285-293, (2014)
2. 森下直紀, 「アメリカ環境史」, 『ソフィア』, 61巻, pp.74-76, (2014)
3. 森下直紀, 「水俣病事件史を世界へ—第9回水俣病事件研究交流集会報告」, 『水俣学通信』, 第36号, pp.4, (2014)

<第2グループ>

4. 外山秀一、他4名, 「韓国密陽サルレ遺跡・新安遺跡の植物圧痕の同定」, 中山誠二編『日韓における穀物農耕の起源』(平成22~25年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究B「日韓内陸盆地における穀物農耕の起源に関する科学的研究」報告書), 山梨県立博物館, 217~224頁, (2014)
5. 外山秀一、他4名, 「韓国華城石橋里遺跡における新石器時代の植物圧痕」, 中山誠二編『日韓における穀物農耕の起源』(平成22~25年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究B「日韓内陸盆地における穀物農耕の起源に関する科学的研究」報告書), 山梨県立博物館, 226~229頁, (2014)
6. 外山秀一、他4名, 「韓国安山大阜北洞遺跡における新石器時代中期の植物圧痕」, 中山誠二編『日韓における穀物農耕の起源』(平成22~25年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究B「日韓内陸盆地における穀物農耕の起源に関する科学的研究」報告書), 山梨県立博物館, 230~235頁, (2014)
7. 外山秀一, 「プラント・オパール分析からみた筋違遺跡の地形環境と土地利用」, 三重県埋蔵文化財センター『筋違遺跡(第2・3次)発掘調査報告書』, 三重県埋蔵文化財調査報告, 115-30、83-99頁, (2014)
8. 外山秀一, 「朝鮮半島における青銅器時代の稲作農耕と地形環境」, 李弘鐘・李僖珍編『青銅器時代の考古学 第1巻 人間と環境』, 韓国考古環境研究所・韓国青銅器学会, 133-145頁(ハンゲル), (2014)
9. 藤木利之, 「長崎湾飽の浦沖ボーリングコアの化石花粉群集からみた完新世の古植生変遷」, 月刊地球, pp.418、219-226, (2014)
10. Aoyama, Kazuo, Hitoshi Yonenobu, Takeshi Inomata, Kazuyoshi Yamada, Hiroo Nasu, Toshiyuki Fujiki,

Yoshitsugu Shinozuka, Katsuya Gotanda, and Yoshiharu Hoshino, “Investigaciones Arqueológicas y Paleambientales en y alrededor de Ceibal, Peten, Guatemala”, XXVII Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala, pp.987-995, (2014)

③ 図書

<第1グループ>

1. 小川さやか, 「日本の中古品は中国の新品より売れる—インフォーマル製品を求めてアフリカ商人が集う中国・広州」, 『Wedge』9月号, 株式会社ウエッジ, (2014)
2. 富田敬大, 「第9章 牧畜開発の動向—進む政策転換と集約的牧畜の導入」, 小長谷有紀・前川愛編『現代モンゴルを知るための50章』, 明石書店, pp.53-57, (2014)
3. 富田敬大, 「第12章 遊牧の定着化—変貌する都市周辺地域」, 小長谷有紀・前川愛編『現代モンゴルを知るための50章』, 明石書店, pp.80-83, (2014)
4. 森下直紀, 「水俣病事件史にみる公害と人権」, 李修京編『グローバル社会と人権問題—人権保障と共生社会の構築へ向けて』, 明石書店, pp.171-175, (2014)
5. 原子力総合年表編集委員会（森下直紀ほか）編, 『原子力総合年表—福島原発震災に至る道』, すいれん舎, (2014)

<第2グループ>

6. 梅原猛、安田喜憲、東根千万億, 「東北の復興とあらたな生命文明の曙」, 『第三文明』4月号, 第三文明社, pp.20-25, (2014)

<第3グループ>

7. 矢野健一（編著）, 『週刊朝日百科 週刊新発見！日本の歴史 50 弥生』, 朝日新聞出版, pp.4-6, 10-15, (2014)
8. 矢野健一, 「人類はなぜ・いつ定住したか」, 『考古学研究会 60 周年記念誌 考古学研究 60 の論点』, 考古学研究会, pp.11-12, (2014)
9. 千葉豊, 「史料を読み解く」, 『週間朝日百科 週刊新発見！日本の歴史 49』, 朝日新聞出版, pp28-29, (2014)

<第4グループ>

10. 高橋学, 「環境史からみた東北地方・太平洋沖地震の津波被害」, 吉越昭久編『災害の地理学』, 文理閣, pp.45-66, (2014年7月14日)

(5) 学会発表

① 海外での発表

<第1グループ>

1. Hiroshi Kondo, “The skin as a site of composition”, Society for Anthropology of Lowland South America, IX Sesquiannual Conference of the Society for the Anthropology of Lowland South America (SALSA), Gotenberg・Unisersity of Gotenberg, 2014年6月28日
2. Takahiro Tomita, “Changing Strategies of Pastoral Management and Mobility in the Suburban Areas of Post-Socialist Mongolia”, International Institute for Asian studies, Changing patterns of power in historical and modern central and inner Asia, Ulaanbaatar・Ulaanbaatar University, 2014年8月8日

<第3グループ>

3. Atsushi UEMINE, Kazuto MATSUFUJI, Masaki SHIBATA, “Paleoliths from MIS 5 to 7 Discovered Recently in Shimane Prefecture, Japan”, Sixth Worldwide SEAA Conference Ulaanbaatar, 2014年6月9日

4. Atsushi UEMINE, Kazuto MATSUFUJI, Masaki SHIBATA, “Recovery of the Old Ground Surfaces at Sunabara Site in Shimane Prefecture, Japan”, Sixth Worldwide SEAA Conference Ulaanbaatar, 2014年6月11日

② 国内での発表

<第1グループ>

1. 富田敬大, 「変りゆくモンゴル牧畜社会—都市近郊における定着化政策と牧畜経営の実態」, 立命館大学環太平洋文明研究センター第3回定例研究会, 立命館大学, 2014年4月24日
2. Chie Ishida, “Nationality and descent in legal problems over the Japanese migration”, International Union of Anthropology and Ethnology, The Future with/of Anthropologies, 東京・幕張メッセ, 2014年5月15日
3. Sayaka Ogawa, “The Unionization of Street Traders: The Riots and Politics of the Street in Tanzania”, International Union of Anthropology and Ethnology, The Future with/of Anthropologies, 東京・幕張メッセ, 2014年5月16日
4. Takahiro Tomita, “Changing Strategies of Pastoral Management and Mobility in the Suburban Areas of Post-Socialist Mongolia”, International Union of Anthropology and Ethnology, The Future with/of Anthropologies, 東京・幕張メッセ, 2014年5月16日
5. Hiroshi Kondo, “Land use and Hunting: property relationships of the Embera’s contemporary life”, International Union of Anthropology and Ethnology, The Future with/of Anthropologies, 東京・幕張メッセ, 2014年5月17日
6. 岩田京子, 「「場所」の構築をめぐるコンフリクトの調停——京都・嵐山における景観保全のための住民組織の活動を手がかりに」, 日本文化人類学会第48回研究大会, 東京・幕張メッセ, 2014年5月18日
7. 近藤宏, 「土地所有と資源管理のはざまの先住民共同体—パナマ東部先住民エンベラによる自治の現在」, 日本ラテンアメリカ学会第35回定期大会, 大阪・関西外国語大学, 2014年6月8日

<第2グループ>

8. 安楽和央、林田明、原口強、山田和芳、篠塚良嗣、五反田克也、米延仁志, 「秋田県一ノ目淵のピストン・コア堆積物から得られた過去7000年間の古地磁気永年変化の記録」, 日本地球惑星科学連合、JGU2014, 神奈川県, 2014年4月30日
9. 山田和芳、篠塚良嗣、瀬戸浩二、原口強、米延仁志, 「氷河湖堆積物に記録されるペルー南部における完新世の環境変化」, 日本地球惑星科学連合、JGU2014, 神奈川県, 2014年4月30日
10. 篠塚良嗣, 「秋田県一ノ目淵年縞堆積物を用いた東北日本の環境史復元」, 立命館大学環太平洋文明研究センター第4回定例研究会, 立命館大学, 2014年5月29日
11. Kazuhiro ANRAKU, Akira HAYASHIDA, Tsuyoshi HARAGUCHI, Kazuyoshi YAMADA, Yoshitsugu SHINOZUKA, Katsuya GOTANDA, Hitoshi YONENOBU, “Holocene Paleomagnetic Secular Variation Recorded in Lake Sediments of the Ichi-no-megata Marr”, Northeast Japan, Asia Oceania Geosciences Society (AOGS), AOGS2014, sapporo, Japan, 2014年8月1日
12. Taisuke SAJI, Akira HAYASHIDA, Tsuyoshi HARAGUCHI, Kazuyoshi YAMADA, Hitoshi YONENOBU, Koji SETO, Yoshitsugu SHINOZUKA, Yu FUKUMOTO, “Magnetic Properties of the Holocene Lake Sediments in Tonle Sap, Cambodia”, Asia Oceania Geosciences Society (AOGS), AOGS2014, sapporo, Japan, 2014年8月1日
13. Kitagawa, J. “Detecting the exact timing of paddy field landscape, formation using varved sediments”, Japan-German Satoyama Forum 2014 in Fukui “Perception and valuation of Satoyama Ecosystems, Approach from Natural Science, Economics and the Arts”, Fukui, Japan, 2014年8月

31日

<第3グループ>

14. 中村大, 「私たちはいかに語ることができるか?—研究の説明力向上と学習素材としての活用可能性—」, 近江貝塚研究会, 第246回近江貝塚研究会, 滋賀県大津市・滋賀県埋蔵文化財センター, 2014年4月26日
15. 中村大, 「関西縄文研データベースの設計について」, 関西縄文文化研究会, 2014年4月例会, 立命館大学, 2014年5月10日
16. 中村大, Simon Kaner, Donald Henson, 「日本考古学および文化遺産に関するオンライン英語教材の開発」, 日本考古学協会, 第80回総会, 東京都世田谷区・日本大学文理学部, 2014年5月18日
17. 矢野健一, 柳原麻子, 「縄文土器と土製品の胎土中における添加された砂粒」, 日本考古学協会, 第80回総会・研究発表会, 東京都世田谷区・日本大学文理学部, 2014年5月18日
18. 千葉豊, 「吉備の貝塚が縄文土器研究に果たした意義」, 岡山市教育委員会, 第2回史跡彦崎貝塚歴史講演会, 岡山市・灘崎公民館大会議室, 2014年6月21日
19. 矢野健一, 中塚良, 佐々木尚子, ほか, 「京都盆地中西部低地、向日市寺戸川縦坑・河床堆積層の文化財科学的研究」(研究発表要旨集 pp.410-411), 日本文化財科学会第31回大会, 奈良市・奈良教育大学, 2014年7月5・6日
20. 上峯篤史, 高木康裕, 竹原弘展, 朝井琢也, 「蛍光X線分析によるサヌカイトの原産地推定に前処理は必要か?」(研究発表要旨集 pp.112-113), 日本文化財科学会第31回大会, 日本文化財科学会, 2014年7月6日
21. 上峯篤史, 「斑晶に着目した新しい石器観察法の提案」(研究発表要旨集 pp.430-431), 日本文化財科学会第31回大会, 奈良市・奈良教育大学, 2014年7月5・6日
22. 中村大, 「関西縄文研データベース作業状況報告」, 関西縄文文化研究会, 2014年7月例会, 大阪府堺市・大阪府教育委員会査事務所, 2014年7月26日
23. 矢野健一, 渡辺裕穂, 「マーク・ディオーン—素材としての考古学」, 第2回京都 Art & Archaeology フォーラム, 京都市中京区・京都文化博物館, 2014年8月10日
24. 中村大, 「関西縄文研データベース作業状況報告」, 関西縄文文化研究会, 2014年8月例会, 愛知県豊橋市・豊橋市文化財センター, 2014年8月30日
25. 千葉豊, 「但馬の縄文土器—小路頃オノ木遺跡と小森岡遺跡—」, 兵庫県芸術文化協会, 兵庫県生活文化大学考古学講座, 神戸市中央区・兵庫県民会館3階303号室(神戸市中央区下山手通4-16-3), 2014年9月12日
26. Atsushi UEMINE, “From inter-site variability of lithic assemblage to ancient inter-site relationship”, International Obsidian Workshop for Young Scientists in Nagawa, Japan, 2014年9月24日
27. 矢野健一, 「「縄文早期後半の滑石含有土器—兵庫県養父市熊野円山遺跡出土土器紹介」, 関西縄文文化研究会, 2014年9月例会, 舞鶴市・舞鶴市商工観光センター・まいづるベイプラザ, 2014年9月28日
28. 上峯篤史, 「京都府舞鶴市志高遺跡出土の北海道産黒曜岩をめぐって」, 関西縄文文化研究会, 2014年9月例会, 舞鶴市・舞鶴市商工観光センター・まいづるベイプラザ, 2014年9月28日

<第4グループ>

29. 高橋学, 「環太平洋地域における災害とゴミ問題」, JICA Kobe, 西宮市役所東館, 2014年6月23日

(6) 省庁、学会、財団などの表彰

なし

(7) 外部資金獲得（競争的研究費、共同研究、受託研究、奨学寄附金等）

1. 競争的資金 科学研究費補助金〔基盤研究(C)〕(2014-2017) (日本学術振興会)
「火山噴火の植生へのインパクトと回復プロセスの高分解能な復元」, 藤木俊之(代表), 計 286 万円
2. 競争的資金 科学研究費補助金 特別研究員奨励費〔若手 B〕(H26~H28) (日本学術振興会)
「〈二世〉から見るブエノスアイレス都市社会の編成と変容: 移民と市民の人類学的研究」,
石田智恵(代表), 計 350 万円
3. 競争的資金 公益財団法人高梨学術奨励基金 (2014. 4. 1-2015. 3. 15)
「斑晶観察法による日本列島「前期旧石器」の再検討」, 上峯篤史(代表), 計 38 万円
4. 競争的資金 公益財団法人高梨学術奨励基金〔若手研究助成〕(2014. 4. 1-2015. 3. 31)
「近現代モンゴルにおける人間=環境関係の変容に関する研究」, 富田敬大(代表), 計 100 万円
5. 競争的資金 公益財団法人三島海雲記念財団 学術研究奨励金 (2014. 7. 1-2015. 6. 30)
「モンゴル都市周辺地域における家畜預託の実態とその変容についての歴史人類学的研究」,
富田敬大(代表), 計 70 万円

(8) 特許

① 出願

なし

② 取得

なし

(9) その他（報道発表、講演会等）

① 報道発表

1. 安田喜憲, 「環太平洋の災害と文明」 電気新聞, 2014 年 4 月 9 日
2. 安田喜憲, 「森の人類史的影響示す」 毎日新聞, 2014 年 4 月 15 日
3. 高橋学, 「震災前年と直後にも「皆既月食」は大地震の前兆なのか」 日刊ゲンダイ, 2014 年 4 月 15 日
4. 高橋学, 「1923 年から現在までの日本列島周辺で発生したマグニチュード 1 以上の地震を取り上げたデータベースの作成について」, テレビ朝日系列「サンデースクランブル」, 2014 年 5 月 5 日
5. 高橋学, 「GW 地震「首都直下と無関係」気象庁発表を信じていいのか」 日刊ゲンダイ, 2014 年 5 月 8 日
6. 小川さやか, 「現代のことば—祭り」 京都新聞, 2014 年 5 月 19 日
7. 安田喜憲, 「三保松原のマツが枯れる」 電気新聞, 2014 年 5 月 28 日
8. 安田喜憲, 「二見浦と富士山」 電気新聞, 2014 年 7 月 10 日
9. 高橋学, 「今夏は台風頻発か 東京を襲う想定外の地すべり、土砂災害」 日刊ゲンダイ, 2014 年 7 月 11 日
10. 小川さやか, 「2014 年上半期の収穫から」, 週刊読書人, 2014 年 7 月 25 日
11. 高橋学, 「小笠原諸島・西ノ島斜面崩壊リスクで早まる首都直下地震」 日刊ゲンダイ, 2014 年 8 月 21 日
12. 安田喜憲, 「女民俗学の確立」 電気新聞, 2014 年 8 月 25 日
13. 高橋学, 「起きない場所で地震急増「南海トラフ」動き出したのか」 日刊ゲンダイ, 2014 年 9 月 5 日
14. 高橋学, 「1923 年から現在までの日本列島周辺で発生したマグニチュード 1 以上の地震を取り上げたデ

ータベースの作成について」, フジテレビ系列「ミスターサンデー」, 2014年9月7日

15. 高橋学, 「広島県広島市八木地区を中心に発生した土石流災害」 7面, 読売新聞, 2014年9月18日
16. 高橋学, 「東京都の指定した災害避難場所の安全性について全地点の土地条件を分析」 日刊ゲンダイ, 2014年9月27日

② 講演会等

1. モリ カイネイ, 「華人キリスト者のトランスナショナリズム——モデル構築の試み」, 「東アジアにおけるキリスト教の越境と交流」プロジェクト研究会、平成26-28年度科学研究費（学術研究助成基金助成金）挑戦的萌芽研究「日本のカトリック教会による移住・移動者支援の実証的研究」（研究代表者：白波瀬達也）, 東京・東洋大学, 2014年5月10日
2. 小川さやか, 「仕事は仕事のダイナミズム—中国—アフリカ間の模造品／インフォーマル交易の活性化」, 大阪北ロータリークラブ例会, 大阪・新阪急ホテル, 2014年5月21日
3. 北川淳子, 「水月湖年縞の魅力」, 若狭観光連盟総会, 若狭町レピア, 2014年6月9日
4. 小川さやか, 「路上空間は誰のもの?」, 阪神シニアカレッジ・マイスターゼミナール, 神戸・尼崎女性センター, 2014年6月12日
5. 高橋学, 「環太平洋地域の災害 I—南米チリを中心として—」, 高橋学教授チリ帰国記念特別講演会、立命館大学環太平洋文明研究センター第5回定例研究会, 立命館大学, 2014年6月24日
6. 小川さやか, 「模造品の増殖を促す複ゲーム状況—エージェンシー研究の展望と可能性」, 民博共同研究会『エージェンシーの定位と作用—コミュニケーションから構想する次世代人類学の展望』, 大阪・国立民族学博物館, 2014年7月5日
7. 北川淳子, 「奇跡の湖 水月湖の年縞について」, 若狭路さとうみフェスティバル, 若狭町縄文博物館, 2014年7月21日
8. 外山秀一, 「失われつつある日本文化の地域性と多様性」, みえアカデミックセミナー2014、公開講座, 三重県生涯学習センター, 2014年08月08日

① その他

なし

以上

拠点名: 自然と人間が共存可能な新たな文明の創造に向けた「環太平洋文明学」の構築

拠点リーダー名: 高橋 学

研究開始	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	研究終了
拠点全体 (運営委員会で企画・運営を行う)	・環太平洋文明研究センターを設立 ・シンポジウム開催 ・JST社会技術研究開発の申請	・環太平洋文明研究センターの展開 ・古気候学研究センターを設立 ・シンポジウム開催 ・科研費・新学術領域研究の申請	・環太平洋文明研究センターの展開 ・古気候学研究センターの展開 ・シンポジウム開催 ・プロシーディングの刊行	・環太平洋文明研究センターの展開 ・古気候学研究センターの展開 ・国際シンポジウム「環太平洋文明学の構築」開催	年稿の精緻な分析から得られた情報を活用し、文明の興亡、歴史の展開を論じる新たな学問体系の創造
グループ① 環太平洋地域における人間＝環境関係の人類学的検討 リーダー名: 渡辺 公三	・レヴィ＝ストロースの神話研究の再評価と環境考古学、縄文考古学、災害地理学のつき合わせ ・各自の現地調査によるデータの収集 10%	・各自のフィールド調査によるデータの収集および各自の到達点の共有化 25%	・「環太平洋文明学」の理論的枠組みの検討 ・各フィールドでの森里海の物質循環構造の把握にもとづく人間＝環境関係の比較検討	・「環太平洋文明学」の理論的枠組みの構築 ・各フィールドでの森里海の物質循環構造の把握にもとづく人間＝環境関係の比較検討	文明論の人類学的再構築と個別社会のスケールでの物質循環構造の解明
グループ② 環太平洋各地の年稿分析による緻密な災害史の構築 リーダー名: 安田 喜憲	・年稿の各種分析(グアテマラの湖沼、ペルー高山の湖沼、バリ島・ブーヤン湖等の火口湖、秋田県一の目湯や小川原湖、長野県深見池など) 40%	・年稿の各種分析(グアテマラの湖沼、ペルー高山の湖沼、バリ島・ブーヤン湖等の火口湖、秋田県一の目湯や小川原湖、長野県深見池など) 55%	・年稿の各種分析(グアテマラの湖沼、ペルー高山の湖沼、バリ島・ブーヤン湖等の火口湖、秋田県一の目湯や小川原湖、長野県深見池など)	・過去の気候変動、環境変動、そして災害が環太平洋地域の文明の興亡に与えた影響の分析	環太平洋地域の文明の興亡と環境史および災害史との相互関係の解明
グループ③ 環太平洋北部と西部の重層圏としての縄文文化と弥生文化の移行解析 リーダー名: 矢野 健一	・遺跡・遺構・遺物の地域的なGISデータベースの試行と、その手法の検討 ・遺跡での調査(杉沢遺跡、葛籠尾崎湖底遺跡) 10%	・遺跡・遺構・遺物の時期的な変遷を可視化するGISデータベースの構築 ・遺跡での調査(杉沢遺跡、葛籠尾崎湖底遺跡) 25%	・GISデータベースにもとづく縄文時代草創期の土器量の変化と気候変動の関係の分析 ・縄文遺跡の立地変化に災害の発生が及ぼした影響の分析	・GISデータベースにもとづく縄文時代晩期の土器量の変化と気候変動の関係の分析 ・縄文遺跡の立地変化に災害の発生が及ぼした影響の分析	縄文文化の起源と終焉における文明と環境変化との相互関係の解明
グループ④ 環太平洋に行ける地震・津波災害 リーダー名: 高橋 学	・地震(津波・火山爆発)被害の史・資料収集および現地調査、各種地図の作成(チリ地震) 15%	・地震(津波・火山爆発)被害の史・資料収集および現地調査、各種地図の作成(チリ地震) 30%	・災害履歴の調査、災害避難地図の作成(スマトラ地震、南海トラフ地震)	・災害履歴の調査(東北日本太平洋沖地震、日本海地震、北海道南西沖地震)	環太平洋地域での災害発生メカニズムの解明、および災害被害のデータベース構築、防災対策の構想

目標
 人類学、地理学、考古学の統合による「環太平洋文明学」の構築

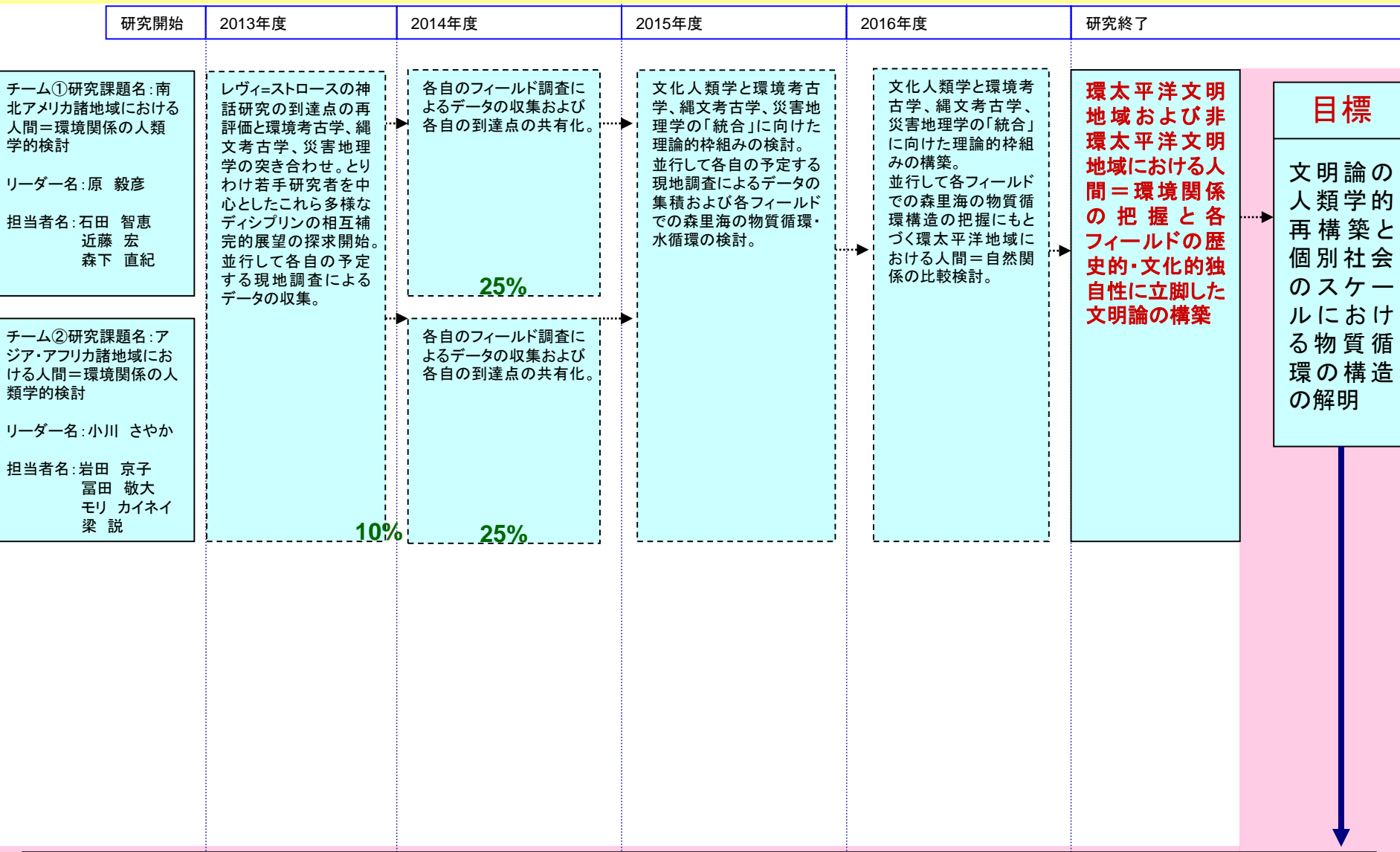
目標
 環太平洋地域における文明の興亡と気候変動・環境変動との関係の解明と将来的展望の構想

拠点の最終目標: 環太平洋地域の災害と文明の興亡の相関を解明する学際的研究の世界的拠点形成

研究グループ計画書(2)

グループ研究課題名: 環太平洋地域における人間=環境関係の人類学的検討

グループNO: 1 グループリーダー名: 渡辺 公三

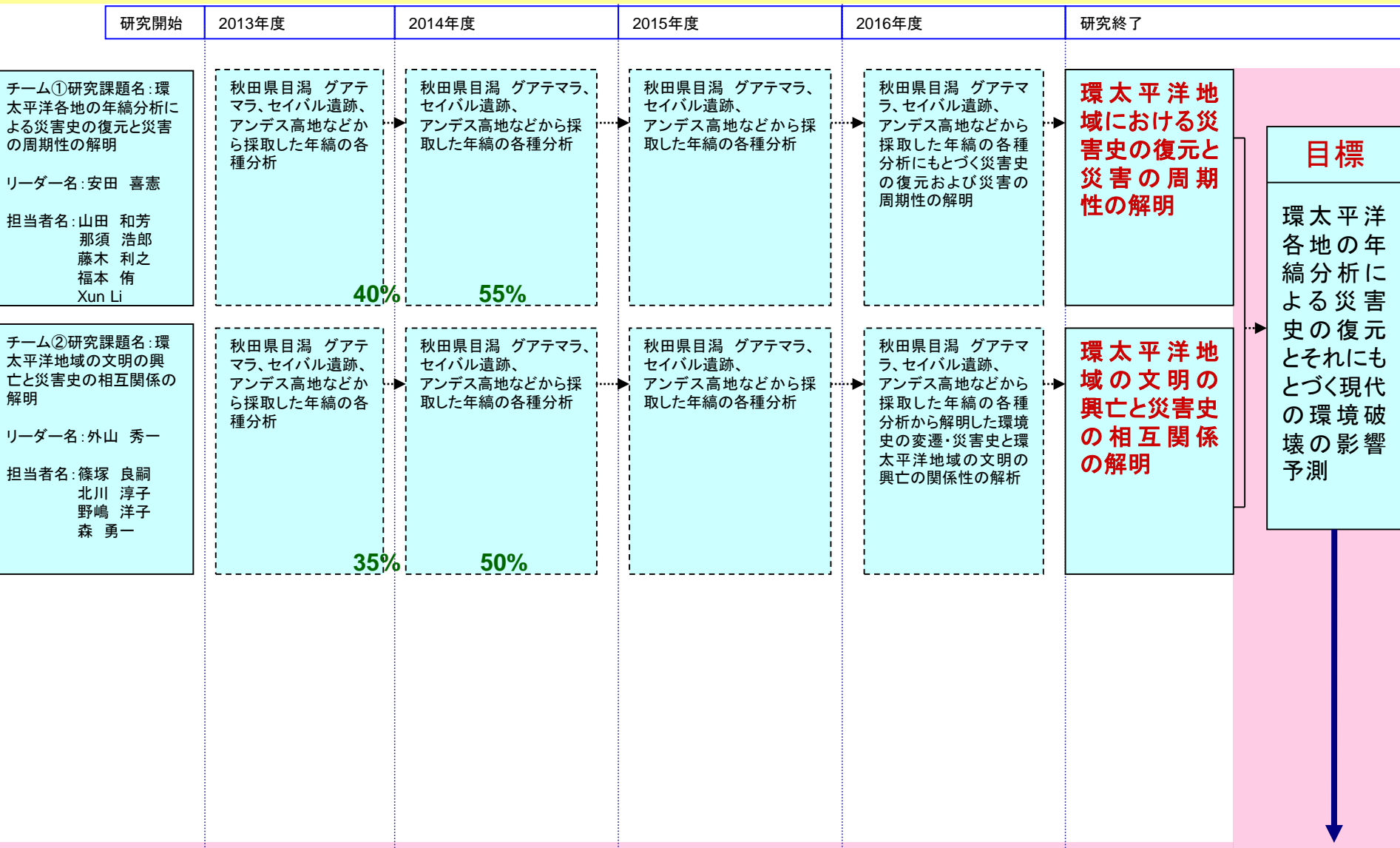


研究グループの最終目標: 文化人類学の視角から環太平洋文明研究の構築に寄与する

研究グループ計画書(2)

グループ研究課題名: 環太平洋各地の年縞分析による緻密な災害史の構築

グループNO: 2 グループリーダー名: 安田 喜憲



研究グループの最終目標: 環境史・災害史が文明の興亡・歴史の転換に与えた影響の解明

研究グループ計画書(2)

グループ研究課題名: 環太平洋北部と西部の重層圏としての縄文文化と弥生文化の移行解析

グループNO: 3 グループリーダー名: 矢野 健一

研究開始	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	研究終了
<p>チーム①研究課題名:縄文文化の起源と終焉を中心とするGISデータベース構築の試行的研究</p> <p>リーダー名:千葉 豊</p> <p>担当者名: 中村 大 篤史 上峯 篤史 塚原 秀之 松森 智彦 宮地 聡一郎 原田 昌浩 大野 薫</p>	<p>遺跡・遺構・遺物の時期的な変遷を可視化するGISデータベースの構築</p> <p style="text-align: right;">10%</p>	<p>遺跡・遺構・遺物の時期的な変遷を可視化するGISデータベースの構築</p> <p style="text-align: right;">25%</p>	<p>遺跡・遺構・遺物の時期的な変遷を可視化するGISデータベースを用いた縄文時代遺跡数変化に基づいた人口動態の変化と気候変動の関係の解明</p>	<p>遺跡・遺構・遺物の時期的な変遷を可視化するGISデータベースを用いた縄文時代遺跡数変化に基づいた人口動態の変化の国際的比較研究</p>	<p>「旧石器から縄文」、「縄文から弥生」への2つの転換期を含む遺跡・遺構・遺物の変化の過程を可視化するGISデータベース構築</p>
	<p>チーム②研究課題名:集落立地変化と災害との関係の把握</p> <p>リーダー名:矢野 健一</p> <p>担当者名: 中塚 良 篤史 上峯 篤史 佐々木 尚子 木村 浩章 丸山 真史</p>	<p>杉沢遺跡、葛籠尾崎湖底遺跡での調査にもとづく地震、洪水、火山灰下降等の災害が、縄文遺跡の立地変化に及ぼした影響の分析</p> <p style="text-align: right;">10%</p>	<p>杉沢遺跡、葛籠尾崎湖底遺跡などでの調査にもとづく地震、洪水、火山灰下降等の災害が、縄文遺跡の立地変化に及ぼした影響の分析</p> <p style="text-align: right;">25%</p>	<p>杉沢遺跡、葛籠尾崎湖底遺跡などでの調査にもとづく地震、洪水、火山灰下降等の災害が、縄文遺跡の立地変化に及ぼした影響の分析</p>	<p>杉沢遺跡、葛籠尾崎湖底遺跡などでの調査にもとづく地震、洪水、火山灰下降等の災害が、縄文遺跡の立地変化に及ぼした影響の分析</p>
<p>目標</p> <p>縄文文化の起源と終焉における文明と環境変化との関係の解明</p>					

研究グループの最終目標: 環太平洋地域における災害と文明の攻防の解明

研究グループ計画書(2)

グループ研究課題名: 環太平洋における地震・津波災害

グループNO: 4 グループリーダー名: 高橋 学

研究開始	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	研究終了
------	--------	--------	--------	--------	------

チーム①研究課題名:
環太平洋における地震・津波災害

リーダー名: 河角 龍典

担当者名: 谷端 郷

1960年のチリ地震およびそれに付随して生じた津波または火山災害による被害の史・資料収集および現地調査の実施
並行して沿岸地域の地形分類図および災害避難地図の作製

15%

1960年のチリ地震およびそれに付随して生じた津波または火山災害による被害の史・資料収集および現地調査の実施
並行して沿岸地域の地形分類図および災害避難地図の作製

30%

2004年のスマトラ地震の、津波堆積物、火山堆積物の調査およびそれにもとづく災害避難地図の作成
並行して1983年の南海トラフ地震の影響が懸念される地域における災害履歴の調査およびそれにもとづく災害避難地図の作成

2011年の東北日本太平洋沖地震の津波堆積物の調査
並行して1983年の日本海地震および1993年の北海道南西沖地震の被害を受けた沿岸地域における災害履歴の調査

環太平洋地域の地震(津波・火山爆発)被害の史・資料収集および現地調査によるデータベースの構築

目標

環太平洋地域での土地の履歴調査にもとづく、災害被害のデータベースの構築とそれにもとづく防災対策の構想

研究グループの最終目標: 環太平洋地域における過去の災害メカニズムを明らかにして、次に生じるであろう巨大災害に備え準備をする